

● 三宅島の復興に向けて

清野聡子 ●

2000年、三宅島は大噴火を起こした。2500年ぶりという大規模な噴火は、20年ごとの小規模噴火の繰り返しと共存する人間生活を想定していた我々研究者にとって大きな衝撃であったと同時に、島の復興に何ができるかという、大きな課題が投げかけられた瞬間でもあった。三宅島は伊豆諸島のまん中に位置する、外洋に囲まれた火山島である。幾度かの噴火によって刻まれた生々しい傷がそこかしこに見受けられるが、島民たちは力強く生きてきた。しかし2000年の噴火以降、住み慣れた島を離れることを余儀なくされ、未だ（2004年現在）帰島が叶わない現実がそこにある。三宅島の自然環境がどのようなダメージを受けたか、災害復旧工事が行われているなかで、自然再生を考えるには人心からいっても困難なのが現状だ。

しかし、海に囲まれた三宅島にとって海岸の生態系、特にサンゴは大きな資源であることも確かである。サンゴが生息する島の南西部は、黒潮が当たる方向に面しているため潮流が速く、水が滞留しにくい。ダイバーらの観察によれば、富賀浜付近は幸い噴出物の堆積や地盤変動によるダメージも少ないようであるが、西部の伊ヶ谷や南部の長太郎池付近は海岸の背後地も含め変化が大きいと報告されている。人工的に復元する案もあるが、生態系保全を基本として自然の再生力に任せるといった選択肢もある。いずれにしても、観光資源としてどのような復興計画が望ましいのか、具体論が求められている。三宅島の海やサンゴを研究してきた人々が、それぞれの研究や技能を持ち寄って、島の復興に少しでも協力できるシステムが模索されているところである。

2004年早春、三宅島はひとつの宝を失った。ジャック・モイヤー博士の逝去である。彼は朝鮮戦争のさなか、アメリカ空軍の兵士として来日した。医療

研究所に配属され、日本脳炎ウイルスを媒介する鳥の役割を研究していた博士は、ある日、アメリカ空軍が射撃訓練場になっている三宅島南西沖の三本岳に「カムリウミスズメ」が営巣していることを知った。アメリカ政府の上層部に働きかけるなど、営巣地を守るために奔走したことがきっかけとなり、博士と三宅島との長い長い交流が始まった。その後博士は軍務をこなしながら継続的に日本の鳥を調査し、1957年、三宅島に移住した。三宅島を「フルサト」と言っていたモイヤー博士の生涯を思うとき、島の自然と人への思いに胸がいたむ。当時、過疎化が始まっていた三宅島では、住み着いてくれる人がいるほど価値があるのか、島民たちは半信半疑だったようである。モイヤー博士の調査活動により、三宅島の価値を見直すことになった島民は、島を訪れる人々との会話の中でも、海の生物や鳥たちの生態のトピックスを語るようになった。

近年、自然環境教育についての議論が多いが、三宅島はひとつのモデルケースと考えられる。印刷物として残っている研究遺産の他に、モイヤー博士は人々の心の中に三宅島の自然を残していった。これらを継承していくことが、今後、三宅島復興の道しるべとなるであろう。



1998年秋 三宅島を語るモイヤー博士（撮影：間曾左智子）